

平成 24 年 6 月号

今月の断酒表彰

M・T さん 南千里支部 断酒三ヵ月
N・Y さん 吹田支部 断酒六ヵ月
N・T さん 吹田支部 断酒三年



平成 24 年 6 月 1 日発行 112
編集・発行 事務局・広報部
<http://suitashi-danshukai.com>

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

<平成 24 年 5 月 1 日入会>

Y・S さん 吹田支部

新しい仲間です。よろしくお願ひします

断酒に思う (29)

アルコール依存症で日本に住むという二重の悲劇

精神科医 和田 秀樹

交通事故の経済的損失についての話が出ていたので、一応調べてみたら、2011 年 6 月に発表された日本損害保険協会の統計では、年間 3 兆 2000 億円らしい。多いと見るか少ないと見るかは意見の分かれるところだろう。というのは、経済的なメリットが損失と比べて大きいから車というある種の凶器が容認されているところもあるからだ。

さて、飲酒運転の厳罰化だが、実は飲酒の場合は、厳罰化だけでは飲酒運転が絶対になくならない事情がある。それはアルコール依存症の問題だ。アルコール依存症の場合、重症になると連続飲酒といってお酒を飲んでいないでがまんできる時間がほとんどなくなってくる。職場でさえ隠れ飲みをするし、家にいるときはずっと酒びたりだったりする。

ただ、地方では、JR を民営化したり、バスなどでも赤字路線がどんどん廃止になったりしている。車で移動するのが当たり前になったので、鉄道やバスなどが経営が成り立たなくなったのだが、逆に JR 問題でも話題になったように赤字を許さない、地方のために国が金を使うのはムダという世論もあって、自動車以外の交通手段がもてない地方はいくらでもある。

当然、アルコール依存症の人も移動手段がないから車を使う。ただ、問題なのは、日本だと連続飲酒レベルの人でなくても、アルコール濃度の基準が厳しすぎるため、大酒家は、残っている酒で、つかまってしまう。今は 5、6 時間酒がきれているから、この時間帯に買い物や仕事をすまそうとして車に乗っても、連続飲酒レベルで飲んだすぐ後に車に乗っても、結局捕まれば一緒だ。

結局、アルコール依存症の患者さんは、免許をどんどん奪われ、社会復帰の道が遠くなる。お酒をやめて依存症を治しても、その時点で免許がないから雇ってもらえない。また依存症に逆戻りしたり、免許がなくても雇ってもらえる都市部に移住することになる。しかし、昔と違って都市部でも仕事がないし、そこで一人暮らしをしていると酒の誘惑が強すぎる。

現在アルコール依存症患者は 200 万人と推定されている。その経済的損失はいかばかりのものかと思う。自殺の 23%

がアルコール依存からみという統計も発表されているが、毎年 7000 - 8000 人、つまり飲酒死亡事故の 30 倍くらいの方が依存症に陥り、自らの命を絶つ。家族に暴力を振う、児童虐待をするために、その子供が精神障害に陥るリスクも大きい。古い統計だが、日本の児童虐待の 10% はアルコール依存絡みだった。もちろん、肝臓病などに陥って亡くなる方も含めると万単位の人間がアルコールで毎年命が奪われている。

ただ、日本の悲劇はほかに二つある。一つはテレビマスコミに勤める人間の強欲だ。WHO はこのあたりの危険性を認識して、2010 年 5 月にアルコールの規制を打ち出した。飲酒運転の取り締まりやアルコール税の導入、アルコール販売の免許制度、自動販売機の販売時間規制(アメリカと違って、対面ではまだ買えるが)などはとくに日本でも導入されているのに、なぜか広告規制だけは日本でやっておらず、その気配すらない。それがなくなるとテレビ局がやっていけなくなるという話だが、そうではなくて、それがなくなるとテレビ局の連中の年収 1500 万円が維持されなくなるということだろう。しかし、それを話題にしそうな人間は絶対テレビから排除される。このような形で、日本のアルコール依存症患者は、せっかくお酒をやめ始めたときに、テレビを見るたびに、おいしそうにビールを飲む CM にさらされるのである。テレビ局の人間が年収 1000 万円でもいいから、人の命を救いたいと思ってくれれば救われるのだが、二つ目は、日本では、酒に弱いか飲めない人間、アルコール依存症にならない人間が人口の半分もいることだ。日本人には、アセトアルデヒド脱水素酵素(ALDH)の活性が弱い AG タイプの人が人口の 45%、ほとんどないタイプの AA タイプの人が 5% もいる。白人と黒人では、これらは実質 0 だという。要するに人口の半分に酒に弱いから、いい加減な広告規制でも一定数しかアルコール依存にならないが、そういう人たちにとっては飲酒運転の厳罰化は当然すべきと考え、規制があるのに車に乗るとか、基準値が世界でいちばん低いことにも同情がわかない。そして、アルコール依存になるような人間は意思が弱いで片づけられる。誰もがアルコール依存になり得る欧米と比べると、酒飲みには厳しいのだ。

アルコール依存が病気ではなくて、性格の問題で片づけられる限りは、問題の解決は難しくなる。そういう偏見がある上に、CM は野放し。これではアルコール依存症の方が年に 7、800 0 人自殺するのも納得せざるを得ない。

年間 2 - 300 件の飲酒死亡事故のために飲酒運転を厳罰化し、さらにそれを極悪非道のように叩くテレビマスコミが、年に数万人も殺しているのに、自分たちの年収 1500 万円も守るために広告規制をやらない。これが日本なのだが、なぜかテレビに出ているほうが選挙で強い。いつになったら、日本の国民はテレビに逆らえるようになるのだろう。

(オフィシャルブログ: テレビで言えない本当の話より)

【今月の「指針と規範」】断酒新生指針

三 酒害体験を掘り起こし、過去の過ちを素直に認める。また、仲間たちの話を謙虚に聞き自己洞察を深める

われわれには、泥酔したときの記憶がまるでない。また、そんなに酔っぱらっていないときでも、記憶の大部分がすっぽ抜けていることがある。そうした記憶にない部分でわれわれは、自分の意思とはまるで関係のない非人間的な行動があったりする。

目覚めたとき、家族の鋭い非難の目に、いったい何をやったのだろうか、と不安になる。ときには、家族が逃げ出していないことすらある。そんなとき、われわれはその原因を知ろうとしなかった。怖いからである。

自分の記憶にある部分は、まだ多少正気があってやったことなので大したことはないが、記憶にない部分には病気の極端な症状が出ている。酒と自分の関係がどんなにひどいものであるのかが証明されている。だから、その記憶にないものまで知ることが、自分の病気の本質を知り、酒を断っていく上でもっとも重要なものになる。

それを知っているのは家族である。特に配偶者が一番正確に憶えている。そして、酒をやめさせるために、あるいは、単に責めるだけのためにすべてを話した。

だが、われわれはそれを認めなかった。酔いが去り正気に戻ったとき、とてもそんなことは信じられなかった。動機がないということだけで、徹底的に否認した。作り話で攻撃されているとすら思った。そうした話を認めると、自分の人間としての価値が失われるからである。

酒を断ってからも、家族の証言がなかなか認められない。しかし、家族は嘘をついているのではない。勇気を出して、事実は事実として受け入れよう。自分の犯した過ちは、本当に過去を反省しているのなら認められるはずである。

酒害体験の中でもっとも大切なものは、様々な問題行動よりも、その中に隠されている酒によって歪められた発想や、人間らしさを欠き始めた心の方である。従って、例会で語る酒害体験は、酔っぱらってやった無惨な行動を詳細に話すことも大切だが、そのときの自分の心の動きを話すことの方がもっと大切である。

(指針と規範 P17～P19)



吹田市断酒会会員の現況

(平成23年度府断現況調査から。平成24年4月1日現在)

- 1 会員数：男性30名、女性1名、計31名
- 2 入会者数(平成23年度中)：
男性3名、女性0名 計3名
- 3 準会員数：6名
- 4 会員の年齢構成：
30代1名、40代3名、50代8名、
60代8名、70歳以上11名
- 5 会員の断酒歴：
1年未満11名、1年～3年4名、
3年～5年2名、5年～10年5名、
10年～20年7名、20年以上2名
- 6 会員の入会時の年齢：
30代3名、40代7名、50代8名、
60代11名、70歳以上2名